

二〇二三年三月二日

山門へ險磴濡らす木の芽雨  
潮騒を問遠に聴きて花菜畑  
探梅の坂振り向けば海みゆる  
黙禱を解けばまぶしき春の海  
まず黙禱捧げ句会や黄水仙  
懐に千本鳥居山笑ふ

二〇二三年三月一日

隆々の肩に春塵仁王像  
椋大樹侍のごとくに水仙花  
昨夜雨に山が膨らむ木の芽時  
大いなる梅の枝垂れの傘の中  
白梅の枝透かし見る天守かな  
弟は姉の言ひひなり雛納  
東北忌海にぶつけし男泣き

二〇二三年三月九日

見晴し台あつちはどつち山笑ふ  
外つ国の止まぬ侵攻春愁ふ  
マネキンを着せ替へてより春の窓  
もの芽出づ茅葺屋根の天辺に  
起伏野に浮き沈みせる春日傘  
水切りを競ふ子供ら鴨帰る  
解体の瓦礫の山へ春の虹

二〇二三年三月八日

童顔の百歳笑まふ雛の宿  
春寒し更地と化しぬ隣組  
幾世紀経て出土せし塚の春  
偕老のお茶で乾杯せる春野

宏 虎  
智恵子  
もとこ  
ひのと  
こすもす  
はく子

みきお  
はく子  
満天  
千鶴  
ぽんこ  
ひのと  
ふさこ

たか子  
みきえ  
ひのと  
むべ  
せいじ  
凡士  
豊実

素秀  
満天  
明日香  
せいじ

老姉妹若き日語る雛祭り

朝日浴びプリズム光りせる雪野  
春光のあまねく窓辺針仕事

二〇二三年三月七日

夫婦塚肩よせあひぬ春風裡  
仙道の門番然と花薊  
降車して気づく春です忘れ物  
雪間原迷彩柄を描きけり  
白杖の佇み聞ける百千鳥  
パンジーの花殻摘みを日課とす  
杖あまた支ふ大樹の垂れ梅  
山寺の鐘うちひびき山笑ふ  
雪解風とらへ高舞ふ鳶を見よ  
日のすみれ背伸びするやに花立つる  
洞だらけなる老幹の梅真白  
立雛を棚に一人の散らし寿司

二〇二三年三月六日

深海に似し朧夜の倉庫街  
啓蟄や児は三歳と指立つる  
放課後へ春泥の靴飛び出せり  
鉄塔は銀のかんざし山笑う

二〇二三年三月五日

腹の中見せたる羅漢春ぼこり  
水甕に舌伸ばす猫水温む

みきお  
隆松  
やよい

菜々  
素秀  
みきえ  
こすもす  
みきお  
明日香  
やよい  
満天  
凡士  
きよえ  
ぽんこ  
はく子

素秀  
なつき  
ひのと  
和子  
たか子  
みきお

毎日句会みのる選・二〇二三年三月一三日